

飲水思源

町長 松岡市郎

地方創生推進交付金に思う

国は昨年から地方創生のための交付金をつくらせている。地方の自律した活動を積極的に支援するので、全国各地で展開されている優良事例を参考に地方の特異性を生かして応募してほしいとの触れ込みであった。そこで本町では、世界の椅子を集めた織田コレクションの公有化と写真甲子園の映画化を主に、1億円を応募した。その結果希望額には千300万円ほど届かなかったものの、8千280万円の決定となった。本町にとって朗報このうえもない。

ところで、この交付金の国予算額は千億円である。第一次申請では455億円が提案され、実際の評価委員の審査結果は182億円と6割の額が認定外となっている。なぜこのように低い採択となったのか。内閣府の評価委員の一人が東川町を訪問されたので聞いてみた。答えは「企画力がない(文書表現がなっていない)」が主たる不採択事由だという。企画会社に千万円規模で委託して応募したところの採択率が高いようだ。国が求めているのは地方の作文能力か?と疑問を抱く。町や

地方の「まち、ひと、しごと」が、企画会社に委託した作文によって元気を戻せるのであれば、企画会社の提案を国がメニュー化し施策として展開すれば良いのではないか。これでは今までの交付金と何ら変わらない。

最も大切なことは地方の知恵と行動であって、自らが元気を起こす力を発電することではないだろうか。地元で暮らす人にとっては、貴重な資源と認識していないこともあり、その掘り起こしをしてもらうことは大切なことである。

そして発掘した資源を自ら生かすことで雇用を生み出し、人口の確保と快適な暮らし実現のために定住環境や教育環境など社会資本の充実を目指す。どれか一つだけを重点的に整備しすべてがうまく回転することは困難であり、総合的な対策が求められる。地方創生事業の採択は、作文評価ではなく、住んでいる人々と住民以外の人々がともに連携し、地方の発想、決断と行動を支援するものでなければならぬと思う。第2次にも積極的に応募したい。

東川町ものがたり(一般書)

写真文化首都「写真の町」東川町/編 評論社/刊



大雪山の麓に広がる東川町。住民たちは大自然のまっただ中で暮らしている。大都会の住人の目には単なる田舎の町と映るかもしれないが、その実態は想像をはるかに超える。写真甲子園、クロスカントリースキー、木工クラフトなどの言葉をキーワードに、東川町で行われている町づくりの仕掛けを紹介しています。

あん(映画、DVD)

ポニーキャニオン



千太郎は、縁あってどら焼き屋「どら春」の雇われ店長として単調な日々をこなしていた。その店のバイト求人を見てやってきたのは、70歳を過ぎた手の不自由な女性、吉井徳江だった。徳江の作る餡(あん)のうまさを舌を巻いた千太郎は彼女を雇い、店は繁盛し始める。ところが心ない噂が彼らの運命を大きく変えていく。今生きているということの限りない美しさを描いた魂の物語。(113分)

貸し出し図書 ビデオ紹介

文化交流館
☎82-4245



★本、DVDの蔵書リクエストをお受けしています★

1人5冊まで14日間、ビデオは1人2本まで4日間

貸し出し検索

<http://www.lib-finder2.net/higashikawa/servlet/Index>

ぶりっかすの子ねこ(児童書)

ディヤング/作 中村妙子/訳 偕成社/刊



ぶりっかすの子ねこは、7ばんめの末っ子。犬屋さんの犬のおりのてっぺんにすんでいます。7匹もいるのですから、まともにおっぱいにありつくこともできません。ある日、子ねこはひっして巣箱からはい出しました。そして落ちたところは、目も見えない、耳も聞こえない老犬のおりの中でした。子ねこは、暖かい寝場所とミルクを求めて歩き回ります。子ねこは幸せになれるのでしょうか?